

問題一（解答例）

問一 傍線部アイウエオのカタカナ部分を漢字に直しなさい。

↓ア 砕 イ 装飾 ウ 腐 エ 構築 オ 検索

問二 道具を共有する前は仲間が伝える情報を信じ、利用するにとどまっていた。しかし、道具を共有することによって、何を、いつ、どこで、どのように処理したのか、というストーリーが共有されるようになったということ。

問三 言葉は意味を作り、因果関係を見出し、ストーリーを作る。さらに空間や時間を超越することができるという性質がある。言葉によって現在を過去と未来から分離し、空間や時間をも超越して論理を創り、言葉を通して世界を解釈し得るということ。

問四 言葉は人や物の移動、情報の共有によって視覚世界を大きく広げ、人間のつながりを増やしたが、人間どうしの信頼の輪を強化し、広げることは大して役立っていないばかりか、その言葉の役立たなさ以上に、言葉は自然の摂理とは違う解釈を与えたり、人間を動物のように見立てたりすることで、暴力や戦いに人を駆り立てたり国家間の争いに命を賭けて参加したりするなどの負の側面があることを主張している。

問五 これまでの物語は、互いにわかりあえないことを前提に作られ、同じ現象に対し異なる反応が生じるからこそ、合意形成の必要性が生まれ、共存という状態を作ってきた。その共存の過程には、情報にはならない愛や感動、衝撃、あるいは不快や愉快などの心の動きがあり、人間にとっての生の意味を形作っていた。しかし、これからの物語は「わかること」への磁力に強く引き付けられ、同質で予定された成果が社会の重要なものとなり、不確実さが生み出す人間らしい情動は、次第に手放されてしまうから。

問題二（解答例）

問一(1) 最初は夫の趣味に付き合っただ釣っていたが、夫が倒れた後も近所の旅館や民宿に依頼を受けて、夫に代わって小遣いかせぎとして釣り続けている、かよさんにとっては思い入れのある仕事としてある。

問一(2) ワカサギ釣りは目に見えて進歩や向上が実感でき、その原始的な労働が明日を生きる活力をもたらすことから、治療の成否とは無関係に死を見せつけられ、徒労のように感じる日々の医者仕事の精神的負担から、一時的にでも逃れさせてくれるもの。

問二 「事が終わる」とは死んでしまっていることを指し、家に戻る際、かよさんが全力で走っていなかったことなどから、安男さんはもう死んでしまっているとかよさんが考えていることが窺われ、それを見た語り手も安男さんがもう亡くなっているように感じられたため。

問三ア 「笑顔を造」ろうと努力するが、結局その「途中でふいの涙におおわれ」という、悲しみを抑えきれない姿も描かれていること

問三イ 長わづらいの病人の介護・看病からの解放感や、夫の死を受けとめつつも決して後ろ向きになることなく、再び語り手と釣りに行くことを楽しみにするなど、これから先の生活へのかよさんの期待感

問題三（解答例）

問一

- ア 吉野の花を見るのが良いと誘ってきた
- イ 参上した／参詣した
- ウ 日数も積み重なって
- エ そのまま家に立ち帰ってみても

問二

連歌

問三

妹背の名を持つ山に続く道を巡れば、妹（妻）と背（私）が逢うこともあろうかと思ったから。

問四

旅の終わりでは名残を惜しみ合いながら同行の者達と別れたが、家では妻のいない現実の中で己の生涯に向き合っている。

問題四 (解答例)

問一 ア あえて (あへて) イ また ウ ひそかに

問二 B

問三 (1) どうして行かないでいようか (行こうではないか)
(2) 不

問四 かならずここにしし、さるあたわず (あたはず)

問五 重耳は斉での暮らしに満足し、去るつもりはなかったが、斉女は晋の公子たる重耳が功臣たちに報いもせず家庭の幸福に安んじていることを恥じており、本人の意に反してでも帰国させるべきだと考えたから。